

## 特別支援学校における職業リハビリテーションの 視点を組み入れた職業教育改善の実践報告<sup>†</sup>

縄岡 好晴\*・前原 和明\*\*

大妻女子大学 共生社会文化研究所\*・秋田大学教育文化学部\*\*

近年、特別支援学校から一般就労への移行を支援するための取組みが求められている。そのため、特別支援学校における職業教育を充実させていくことが必要である。本研究では、特別支援学校における職業教育の改善の実践について報告した。改善の実践として、職業リハビリテーションの支援技法である職務分析及び課題分析を実施し、これまで教室で実施されてきた作業学習の職務内容の再整理を行った。加えて、職務を再編及び新設する等し、教育を実施するための教室環境の整備を行った。このような改善の取組みは、個々の生徒の障害特性のアセスメントとアセスメント結果に基づいた指導の実施を促すと考えられた。また、この実践は、より多様な障害程度の生徒の指導を充実させると考えられた。

キーワード：職業教育、職業リハビリテーション、職務分析、課題分析

### I はじめに

2017年3月の特別支援学校（知的障害）高等部の卒業者のうち、就職者は32.9%であったのに対して社会福祉施設等利用者は61.5%の割合であった（文部科学省、2018）。この就職者の割合は年々増加しているがごく僅かである。2018年4月の「障害者の雇用の促進等に関する法律」の改正により法定雇用率が引き上げられ、昨今の経済的動向と相まって障害者雇用の促進の動きが広がっている。このような背景から特別支援学校高等部の教員には、在学時の教育のみならず卒後の社会参加に向けての本人及び保護者の願いに応えていくことが期待されている。

2011年1月の中央教育審議会の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答

申）」では「キャリア教育の実践が、各機関の理念や目的、教育目標を達成し、より効果的な活動となるためには、各学校における到達目標とそれを具体化した教育プログラムの項目を定め、その項目に基づいた評価を適切に行い、具体的な教育活動の改善につなげていくことが重要である。」との答申が出された。特別支援教育においては、この答申を踏まえ職業教育の充実及び進路指導の強化等が図られてきている。更に2017年3月に告示された学習指導要領では、小学校段階からのキャリア教育が明確に位置づけられることとなった。このような背景から職業教育の強化を図っていくことが必要である。

内海（2004）は、移行支援における課題として、「生徒の移行支援計画の策定への主体参加」と共に、「移行支援計画を実行していくための仕組み及び環境整備」を挙げている。吉田ら（2008）は、社会への移行に際して職業リハビリテーション（以下、「職リハ」とする）の機関との連携の重要性を指摘している。また、移行支援に携わる進路指導教員と職リハに携わる支援者間での考えや知識・スキルの違いが大きくあり（藤井ら、2013・2017）、職業教育と移行支援へのスムーズな連結ができることが望

2020年1月7日受理

<sup>†</sup>Kousei NAWAOKA\* and Kazuaki MAEBARA\*\*, A case report of improvement of career education using vocational rehabilitation techniques at special support school for children

\*Institute of Inclusive Society and Culture, Otsuma Women's University

\*\*Faculty of Education and Human Studies, Akita University

まれる。

国立特別支援教育研究所（2012）の調査によると、具体的に実施している職リハの機関との連携内容としては「職場開拓への協力」や「進路指導・職業教育に関する助言」が挙げられるに留まっている。特別支援教育領域において、職業への移行支援場面での職リハ機関との連携は不十分であり、肝心の職業教育の実践への職リハの寄与は少ない現状にある。

前原ら（2019）は、日本職業リハビリテーション学会第47回大会においてワークショップを開催し、このような特別支援教育の課題について議論を行った。そして、議論を通して、特別支援学校に代表される特別支援教育と障害者の職場定着を支援する職リハ機関の関係者間での「見立て」＝支援に対する認識の違いがあることを指摘している。この違いの具体的な例とは、特別支援学校の教諭は、現在の生徒の状況に基づき積み上げの的に現在の支援の見立てを持って教育を提供していくのに対し、職リハ機関の支援者は、将来の目標に基づき目標設定的に現在の支援の見立てを持って支援を提供しているというものであった。最終的に、特別支援学校卒業生の社会への移行に向けては、特別支援教育と職リハの両領域の関係者が見立ての違いを意識し、社会参加に向けた共通のビジョンを共有することが必要であると結論づけている。あくまでもこの議論は、職リハ領域における議論にすぎないかもしれない。しかし、特別支援教育において職業教育、進路指導、キャリア教育、移行支援といったキーワードで展開される教育及び支援を実践することが求められる昨今において、その改善に向けての重要な視点になると考えられる。

従前より、特別支援学校においては学校卒業後の就職に向けての職業教育が作業学習、自立活動のみならず、様々な教育科目の中で実施されてきたという現状がある。しかし、普段の学校教育の中で実施されてきたが故に、改めて職業教育とは何か、どのように展開し、生徒の社会参加につなげていけばよいのかという戸惑いが教員間にあるようである。

そこで、本研究では、職リハとの領域横断的な連携の視点から職業教育のあり方を再整理する。そのため、ここでは特別支援学校における職業教育の改善に取り組んだ実践を取り上げ、その職業教育改善の取組みの意味について検討する。

## II 方法

### 1 研究方法論

特別支援学校における職業教育の改善のあり方は、まだ十分に検討されていない現状にある。今後の更なる実践へと継承発展されていくためには、改善のあり方を検討するための基礎的資料が必要である。よって、ここでは、特別支援学校を対象とした職業教育の改善取組みの基礎的資料として実践報告を行う。

### 2 実践報告の対象施設

A特別支援学校を実践報告の対象施設とした。関東圏にあるA特別支援学校には、肢体不自由教育部門、知的障害教育部門の2部門が設置されている。

この内、知的障害教育部門において、2018年度より職業教育を実施展開する際のアセスメントツールとしてTEACCH Transition Assessment Profile（以下、「TTAP」とする）を導入している。なお、このTTAPは、自閉症児を中心に就労移行のための支援を提供する上で有効なアセスメントツールと言われているものである。

このA特別支援学校では、卒業後に求められる様々なスキルの獲得を目指して指導計画を立案し、生徒の教育指導に取り組んでいる。2019年度からは、知的障害教育部門での実践に基づき、肢体不自由教育部門においてもTTAPを導入した取組みを開始している。本研究では、肢体不自由教育部門での実践を報告する。

### 3 実践の内容

#### (1) 実践期間

2018年4月～2019年3月の1年間。研究代表者は2週間に1回のペースで計22回、対象施設を訪問し支援した。なお対象とした作業学習の授業については期間中に計8回実施した。

#### (2) 支援項目

コンサルテーション：授業観察及び事例検討会を実施し、教員（作業チーフ、クラス担任、校内研究担当者）に対するコンサルテーションを行った。90分、1回的事例検討会では、作業学習の内容について、事例検討会において検討して立案した改善計画がどのように実践され、どのように実行されたかをビデオ映像や授業のエピソード記録をもとに検討した。

#### 4 倫理的配慮

個人及び組織名を消し、事例の本質を損なわない程度の修正を行った。

### Ⅲ 結果

#### 1 支援環境のアセスメント

A特別支援学校の教員へのコンサルテーションを通じて明らかになった肢体不自由教育部門が抱える課題は以下の2つのようなことであった。

1つ目の課題は、準ずる教育課程の生徒と知的障害を併せ有する教育課程の生徒が合同で作業に取り組むという教育指導上の実態があったことである。そのため、個々の障害特性に応じた介入を実施することが難しく、職業教育に十分に入り込めない生徒が多く存在していた。

2つ目の課題は、知的程度の違いが大きくあったことである。そのため、個々の生徒の評価するための基準が新たに必要であると考えられた。

以上のような課題状況を踏まえて、職リハにおける就労支援技法を用いた職業教育の授業改善の取組を行うこととした。

#### 2 モデルクラスでの職務の分析

A特別支援学校では、様々な作業種目を取り扱う作業班を持つ。まずは、研究協力が得やすかったフィルム加工班をモデルクラスとし、職務分析 (Job Analysis) 及び課題分析 (Task Analysis) を実施した。

なお、職務分析とは、通常、障害者の入職時の支援として、想定される職務が「どのような作業から構成されるのか」を時系列に沿って分析し、各作業のタイミング、注意事項等とセットでスケジュールとして整理して表上に示すものである。また、課題分析とは、職務分析で明らかになった職務を行動レベルでより簡単な行動として手続きに沿って作業工程のリストを作成するものである。いずれも職リハにおいて頻繁に使用される支援介入のための就労支援技法である。

本実践において、この職務分析はフィルム加工班を担当する教員が主体となり実施した。まず、職務分析の実施結果を表1に示した。職務分析の結果、フィルム加工班における作業は9つの職務に整理することができた。次に、9つの職務を課題分析し、結果として得られた作業工程から、内容を教員間で

協議、検討し、表2～4のような職務の再編及び新設を行った。担当教員が職務分析及び課題分析を実施することで、自分たちが実施する班作業が、「どのような作業から構成されるのか」、「どのような要素を持った職務であるか」などを把握することが良かったようであった。

これまでフィルム加工班の作業は、表1のように分析されておらず、担当教員が個々の生徒の状況を考慮して、できる範囲の仕事割り当てことや各作業を繰り返す等の指導を実施していた。職務分析により、フィルム加工班で行う作業の全体像を教員が把握できた。

次に、これらの分析で得た職務から、フィルム加工班の作業を図1のように構造化した。改善前は、大まかな作業の流れは決まっていたが、各作業を個々人が黙々と行うような教室設定となっていた。改善後は、製造部として流れをまとめるとともに、分析を通して再編及び新設された受注部をパーテーションで区切り、作業を実際の職場に近い形で構造化するような教室設定とした。加えて、空いたスペースに、ミーティング・エリアを設置した。

これまで作業技能の獲得のための指導が主となっていたが、この教室設定により、作業技能の指導に限らず生徒同士の報告・連絡・相談といったコミュニケーションの指導や生徒同士の協力や助け合いといった対人的な技能の指導も可能となった。

表1 フィルム加工班における作業の職務分析

| 職務              | 内容  |
|-----------------|---|
| 印刷              | 指定されたデザインを印刷する<br>印刷の可否を判断する                    |
| セッティング<br>ラミネート | ラミネートフィルムに用紙をセットする<br>セッティングされた商品をラミネートする       |
| カット・角丸          | ラミネートされた商品をカットする<br>カットされた商品の角を丸くする             |
| 検品              | 検品基準に沿って、商品を検品する                                |
| スタンプ<br>シール     | ラベルシールにスタンプを押す<br>ラベルシールを袋に貼る                   |
| 袋詰め             | 商品を袋詰めする  |
| デザイン            | iPadで商品のデザインを作成する<br>iPadで作成したデザインのデータをICTPCに移す |

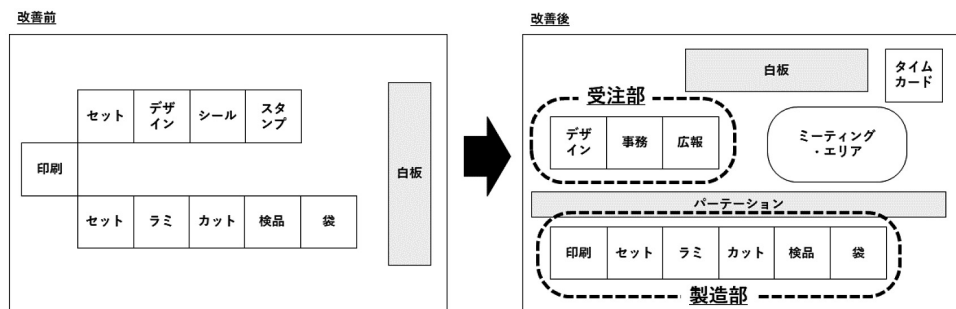


図1 フィルム加工班における作業の流れの改善

表2 デザイン係(再編)の職務内容

| 作業工程                      |
|---------------------------|
| iPadを机上に準備する              |
| 発注書を見て、デザインの依頼を確認する       |
| iPadのアプリを用いて、依頼通りのデザインをする |
| デザインの確認を依頼者にする            |
| デザイン案について、報告・相談する         |
| 手ぶれせずきれいな線を描く             |
| 配色を決め、色を塗る                |
| 文字を入れる                    |
| デザインができれば、報告・相談する         |
| 修正依頼があったらその通りに修正する        |
| できたデザインを、Macbookに入れる      |
| デザインの保管場所を印刷係に伝える         |
| 印刷係が保管場所を理解したことを見届ける      |
| 分からない点は具体的に自分から質問する       |

### 3 組織全体での取組み

最後に、組織全体での取組みとしていくために、上記のようなモデルクラスの改善を事例検討会等の機会を通じて共有した。そして、その他の作業班においても、各作業について同様の職務分析及び課題分析を実施した。その結果、すべての作業班において、職務内容を整理し、職業教育の充実に向けて職務を組合せるなどをし、作業の流れを改善することになった。

このような取組みの結果を図2に示した。図2は作業改善の前後での作業工程数の変化を示したものである。いずれの作業班においても、作業工程数を増やすことができたことが確認できる。作業班のうち、最も改善の取組みの効果があったと考えられたのは、より重度の生徒が多く在籍するリサイクル班での作業改善の取組みであった。この理由として、

表3 事務係(新設)の職務内容

| 作業工程                            |
|---------------------------------|
| 「仕事一覧」を見て、自分の仕事を確認する            |
| 仕事に応じて必要な物を準備する                 |
| (出勤管理) 全員のタイムカードを抜く             |
| (出勤管理) 出勤・欠勤をデータ入力する            |
| (在庫管理) 「在庫管理未」の製品を運ぶ            |
| (在庫管理) 製品を種類ごとに数える              |
| (在庫管理) 数値をデータ入力する               |
| (テブラ) 指定された太さ・枚数のテブラを作成する       |
| (テブラ) テブラを指定された場所にまっすぐ貼る        |
| (シュレッター) 指定された用紙をシュレッターにかけ、処分する |
| (シュレッター) 必要に応じて袋を代える            |

表4 広報係(新設)の職務内容

| 作業工程                              |
|-----------------------------------|
| 「仕事一覧」を見て、自分の仕事を確認する              |
| 仕事に応じて必要な物を準備する                   |
| (書類作成) 「仕事一覧」に書かれている通りに書類等を作成する   |
| (書類作成) 自分の意見を書類にまとめ、時間をとって全員に相談する |
| 分からない点は具体的に自分から質問する               |
| 優先順位を考えて取り組む                      |
| 一つの仕事が終わったら報告する                   |

職務分析及び課題分析を実施した教員が想定した障害がより重度の障害のある生徒であったため、教員の想定に基づき、より手厚く作業工程を分析できた結果であった。この結果、重度な障害程度の生徒であっても作業に取組みやすい、多様な特性に応じた環境作りに繋がったことが確認できた。



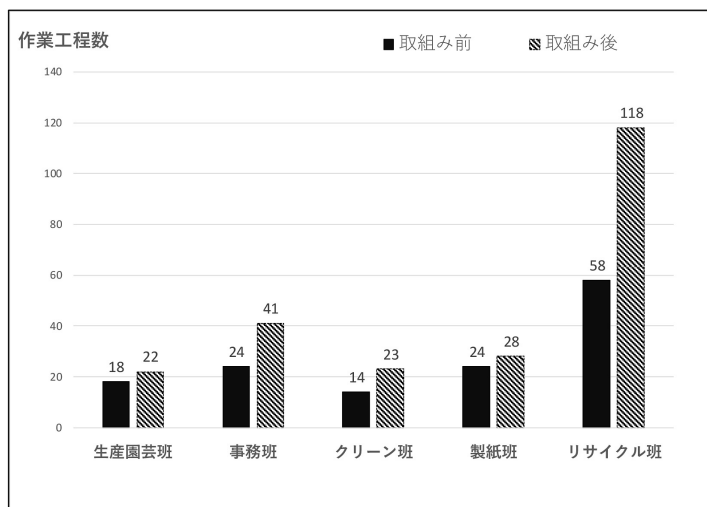


図2 改善の取組み前後での作業工程数の変化

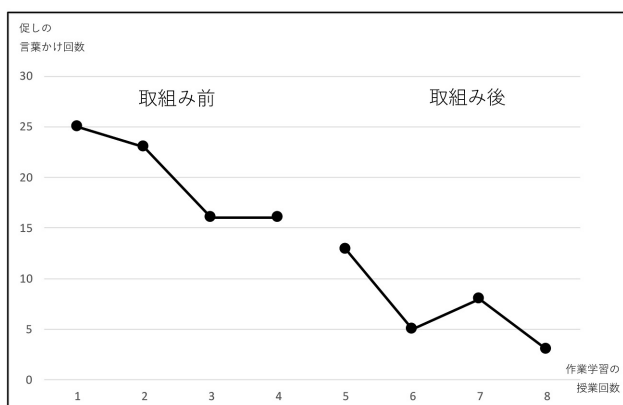


図3 作業学習での教諭の促し言葉かけ回数の変化

#### 4 生徒への対応方法の変化

これらの取組みにより、作業学習の授業のあり方が改善され、教員の生徒への対応方法の変化が確認できた。図3に、特に顕著な変化が見られた製紙班の作業学習の授業における作業指導場面での教員による生徒への作業促しのための声かけの回数の変化を示した。コンサルテーションの取組みを経る中で、促しの声かけ回数が徐々に減ってきたこと、改善の取組みの前後で大きく回数が減少したことが確認できる。

特に製紙版では、改善の取組みと共に、障害のある生徒にとって作業理解がしやすいための工夫として構造化等の支援もコンサルテーションを踏まえて

実施した。当然、授業を重ねる中で作業に対する理解や慣れが生徒の中に生まれてきたことが考えられる一方で、生徒の特性にあった作業種を分析し、作業の流れを理解してもらえようような支援を提供できたことの効果が示唆される。

#### IV 考察

##### 1 職業教育における環境改善の意味

職務分析及び課題分析は、職リハにおいて雇用受入をする企業での職務の創出や職務習得のための支援として活用される。これらを特別支援学校の職業教育場面において活用した。この分析により、従前から「当たり前」として教育活用されてきた作業学

習の授業をより生徒の実態に合った取組みとして再構成することができた。

これは新たな職務が創出できたという環境改善の意味に留まらない。職務を整理することは、教育場面で個々の生徒の職業適性や支援の手立てを把握するための評価基準ができるということである。よって、最終的な目標となる職業への移行支援において有用なアセスメントの手立てが作られるという大きな意味を持つと考える。実際、本研究で対象となった部門における教員からは、生徒自身が評価基準から目標設定を定めることができ、個々へのフィードバックを実施することがやり易くなったとの反応を得ることができた。

## 2 多様な障害のある生徒への教育効果

本実践では、フィルム加工班をモデルクラスとして実施した上で、他の作業班においても実施し、学校全体での職業教育のための環境づくりを行った。

従来、作業種目を変更することは難しいために、障害程度を考慮した職務を設定することが一般的である。そのため、各職務の中で個々の障害特性に対応した教育指導をすることが難しいという事情がある。しかし、このような職務の再整理の取組みには、一つの職務の中に多様な生徒が活躍する機会を設定できるという利点がある。このような取組みの教育効果として、重度の障害のある生徒に対する支援において「ここが少し間違っているから、もう一度直してきてね。」等の繰り返し指導の形から「このようにしたら良くなるよ。」といった支援的な関わりを中心とした指導が実施し易くなることが挙げられる。特に、教育現場では集団指示が中心となり、言語的な指示が多くなる現状がある。そのため、作業の促し方（適切なプロンプトの出し方）を意識した介入は行われにくい。このような支援的視点を持つことができることは、個別生徒に対する関わり方を見直す機会にも繋がっていくと考えられる。

一般就労への移行支援においては、生徒が得意とするスキルと作業種目をマッチングのための情報を得ることや生徒の強みを活かした具体的な支援を提供することが必要である。この改善は、このような移行支援の視点と共通するものとなり、大変有用であると考えられる。

## 3 生徒の主体性の促進効果

このような実践は、単に教育のあり方を改善し、教員の指導のし易さを増やすだけのためのものではないと考えられる。生徒に対する促し声かけの回数の減少に効果があったことが示唆されることから、生徒の待ちの姿勢を減じ、生徒の主体性を導き出すことに繋がっていたと言える。

名古屋（2013）は、キャリア教育においては、生徒が見通しとやりがいが持てること、手応えを得ることができること、満足感を得られることを通して生徒の主体性を向上させることが大切だと指摘している。職務分析と課題分析の実施により、作業工程を明示することになり見通しが持てたことや授業環境を改善することで作業にやりがいと手ごたえをもって取り組むことができるようになり、生徒の主体的な活動を促進することに繋がったと考えられる。このように本実践の取組みは、主体性向上のための具体的な内容であったと理解することができる。通常、生徒のキャリア教育における主体性を生み出す方法はなかなかわかりにくいことが実情であるが、このような改善の取組みとして具体的な対応の道筋を示すことができたと言える。

## V おわりに

本研究では、特別支援学校における職業教育の改善の取組みについて報告を行った。このような職リハの知見を取り入れた特別支援学校での実践報告はまだなく、今後の職業教育のあり方を検討していく上で貴重な参考資料となると考えられる。

その上で、本研究の限界は、あくまでも関東圏における一つの事例報告にとどまっているということである。そのため、更なる実践での一般化や他校での応用に向けた検討が必要であると考えられる。そのため、関東圏の職業構造と地方都市における職業構造の違い等の事例の成立条件の検討や職業教育に必要な本質的要件は何かといった検討をさらに行っていくことが求められる。これらは今後の課題とし、更なる実践研究を通して検討していくこととしたい。

## 文 献

文部科学省（2018）：特別支援教育資料（平成29年度）。  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1406456.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456.htm)（Retrieved 2020.

1. 6)

国立特別支援教育総合研究所 (2012) : 特別支援学校高等部 (専攻科) における進路指導・職業教育支援プログラムの開発 研究成果報告書. 国立特別支援教育総合研究所

吉田昌義・藤田 誠・関口トシ子 (2008) : 特別支援教育 (知的障害・自閉症) における進路指導・支援-担任のためのガイド. ジアース教育新社.

藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎 (2013) : 特別支援学校 (知的障害) 高等部の進路指導担当教員に求められる専門性: 職業リハビリテーションとの関係から. 職業リハビリテーション, 25(2), 2-13.

藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎 (2017) : 特別支援学校高等部進路指導担当教員の知識・スキルの活用度及び満足度の関連に関する研究. 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要, 15, 23-31.

内海 淳 (2004) : 新たな進路指導・「移行支援」への転換. 松矢勝宏 (監修) 「主体性を支える個別の移行支援」大揚社, 9-28.

前原和明・上原深音・縄岡好晴・古野素子・山口明日香 (2019) : 支援でつなげる職業リハビリテーション~教育から職業への移行 (トランジション) に焦点を当てて~. 日本職業リハビリテーション学会 第47回大阪大会プログラム・発表論文集, 165-167.

名古屋恒彦 (2013) : 知的障害教育発, キャリア教育. 東洋館出版社

## Summary

In recent years, a lot of efforts have been needed to support the transition from special support school to employment. Therefore, it is necessary to enhance career education at special support schools. This study reports on efforts to improve career education in special support school. As an improvement effort, job analysis and task analysis which are the technique of the vocational rehabilitation were carried out, and the job content which had been carried out until now was rearranged. In addition, the classroom environment for career education was improved by reorganizing and establishing new jobs. These improvement efforts were considered to encourage the assessment of individual students' disability characteristics and the implementation of guidance based on the assessment results. It was also thought that this improvement effort would enhance the support of students with various disabilities.

**Key Words** : Career Education,  
Vocational Rehabilitation,  
Job Analysis, Task Analysis

(Received January 7, 2020)